

ONE LOVE 通信 41号

2009年12月6日発行

今年も忙しい年でした。いつも何かに追われているようなプレッシャーがあり、精神的には少々辛い年となってしまいました。来年は穏やかな気持ちで仕事が進められるといいな。そしてまたお詫びです。ワンラブ通信発行の遅れ！本当に申し訳ございません。書きたいことはたくさんあるのですが、それに集中できず、発行を楽しみにしてくださる人たちの期待を裏切ってしまいました。もっと上手に時間を使えるように、気をつけます！



【職業訓練開始】

ブルンジで義足を作り始めてもうすぐ2年。ガテラやスタッフと共に、何度もルワンダとブルンジを行き来しながら、あっという間の2年である。

今回新しい展開があった。去年、ブルンジの警察とパートナーシップを結び、何を進めていこうか試行錯誤の上、障害を負った警察の人たちに技術訓練をしようということになりました。ありがたいことに、警察学校の一部を提供してくれるとのこと。

まずそこに義肢製作所を引っ越ししました。いくつか部屋を分けてくれたので、そこで義足製作作業を進めると共に、スタッフの寝床も一緒に引っ越し。今まではアパートを借りて、そこで共同生活をしていたけれど、これからはそこで寝泊まり。義肢製作所が目と鼻の先（と言うよりは同じ敷地内）なので、遅刻は許しません！まだ設備が十分ではないので、完全な引っ越しではありませんが、いずれはそこで自分たちで食事を作り、仕事も進めていきます。

今までよりもずっと広がったので、作業しながらお互いの体がぶつかることもありません。ただ広すぎて照明が隅々まで行きとどかず、ちょっと暗いのが玉にきず。

さてそこでどんな職業訓練を行っているか？

まずは義足の製作。これは私たちの十八番なのでもちろん。エマーブルやパトリックの指導のもと、ブルンジの障害者に義足の作り方を教えています。みんな、なかなか器用です。でも相変わらずおしゃべりが多いなあ…。そこに私やガテラが現れると、ピタッとおしゃべりがやむ。本当にこの辺は全世界共通です。みんなて集まっておしゃべりをして、私やガテラの姿が見えると、蜘蛛の子を散らしたようにみんな仕事に復帰する。この辺、ちょっと悲しいです。そんな私たちってガミガミかしら…。

義足作りに大切なもう一つの仕事。杖の製作。普通の鉄パイプや鉄板を溶接加工して、杖を作ります。パイプを腕のラインにあったように曲げ、電気溶接をする技術を教えています。パイプを切ったり、曲げたり、溶接したりする作業は全くの肉体労働で、ブジュンブラの暑さに負けて、



裸で作業しています。でも溶接する時など、ちょっと危ない気もするけれど、きっとこれがブジュンブラ流なのだ。



＜左：ランニングで溶接中。右：出来上がった杖＞

多くの障害者は日本でも見かけるような、伸び縮みのする、軽い杖をほしがっているけれど、ブルンジの状況を考えて、すぐに傷んでしまい適当ではありません。だから多少重たくても、頑丈で、壊れた時修理がしやすい鉄パイプ製杖を作っています。また道路が凸凹なので、日本の杖の先に付いているようなゴムでは、すぐに減ってしまう。だからこれも古タイヤを利用した滑り止め。これは結構長持ちするよ。ガテラの以前の杖はもう10年以上も使っており、普通の鉄パイプであるにもかかわらず、持っているところが自然とぴかぴかに磨かれ、減っては継ぎ足し…と言う感じで、アンティークとして売り出したいほど。

そしてもう一つの職業訓練は、ブルンジの太鼓を利用して、中にラジオを内蔵させたワンラブオリジナル“ラジオドラム”製作、そして電化製品の修理。これを教えるのは、ガテラの昔からの友人たち。子供の頃障害者の施設で一緒に育った仲間です。だからみなさん、そこそこのお年。ルワンダの外に出るのは初めてという長老たち。この長老たち、なかなかです。つまり、仕事もプライベートも。ブルンジまでは一緒に車で行きました。途中休憩をしている時、両足に装具を履いた長老が、階段をうまく降りることができず、スローモーションのように落下！焦っているのは私だけでした。ガテラを含め、他の長老たち曰く「俺ら障害者は、いっつも転んでいるから、そんな心配することはない！」そんなもんでしょうかねえ…。転んだ本人も、全く気にしてない。ズボンの埃をはたく余裕さえあった！



＜左：左側が転んでしまった長老。ラジオドラム製作中。

右：ブルンジ事務所を引っ張る若手！？

左から、パトリック エマーブル＞

で彼らの仕事ですが、黙々と太鼓を切ったり張ったり、ラジオを入れたり。見ていて面白いです。傍らでは、半田を使ってラジオの修理。う～ん、長老たち、なかなかやる

ではないか。カッコいいぞ。

しかし！仕事が終わると…。みなさん、お酒が大好きで、の飲み方が半端ではない！そこまで酔いたいのか！と思うくらい飲む。日本でもいるでしょ。今日飲んでおかないと、明日は飲めないかもしれない！って感じで飲む人。そして酔っ払いの常、くどくなる。意味のないことを何度も何度も繰り返し話しかけてくる。最初のうちは聞いているが、私も仏ではない。いい加減面倒臭くなって、そっぽを向いてしまふのだ。しかもこの長老たち。酔っぱらうと、自分が使っていた杖をどこかに忘れてしまうのである。本当に杖が必要なのですか？謎である。

長老の一人は、ガテラと幼いころ一緒にいたずらをした仲間。この人がまた底なしである。しかも飲むと食事を一切しないので、体のためにも全く良くない。だからしばしば体調を崩して病院にかかっていた。

でも、今彼らが寝泊まりしているのは警察学校の中。自分で好き勝手なことができない状態。しかも門限がある！8時！どんなに外で飲んでいても、8時には門を閉められてしまうので、みんな大人しく就寝するようである。そんな生活だから、食事朝昼晩ときちんと三度。ブルンジに来てから大して時間も経っていないのに、みんな健康的になってきた。良いことである。お肌のつやも若い人に負けない。

こんな感じで職業訓練が開始しました。果たしてうまくいくだろうか？エマーブル、パトリック、がんばってくれ！そして長老たち、若いものに負けるんじゃない！

しかしブジュンブラは停電が続き、なかなか私の事務仕事が進まない。今回は今まで来たブルンジの障害者のデータを整理。膨大な量である。一人一人のカルテをチェックして、いつ誰に何を渡したかをパソコンにインプット。ああ、そんな時。停電だ…。ひどい時は数日続く。ブルンジの義肢製作所にはまだ発電機がないので、非常に困る！ガテラの友人の家に駆け込み、パソコンを使わせてもらう。この量を半日でインプットしなければいけない。挨拶もそこそこに、鬼のようにパソコンに向かう。おかげで肩こりと腰痛が再発だ！でもその甲斐あって、今まで曖昧になっていたデータがまとまり、ホッと一息。仕事もやりやすくなったのである。

疲れきって家に戻ると、ああ、やっぱり停電だ。夜はランプの明かり。家の中は暑いので、食事は外に出したテーブルで。ランプの幻想的な灯の中、ガテラと二人で食べる食事はロマンチックと言えば非常に聞こえは良いが、実は回りを蚊がぶんぶん飛んでいて、マラリアが心配な二人は、さっさと食事を済ませ、明日の仕事に備えるのである。

【ワンラブ・ゲストハウスへようこそ！】

義足を作る仕事と並行して、ワンラブではゲストハウスとレストランを運営しています。決して豪華なゲストハウスではありません。でもビジネスライクではない雰囲気売り物です。

最初は訪れる旅行者もあまりいませんでした。でも今はガイドブックに載せてもらっているためか、海外からもお

客さんが来てくれるようになりました。口コミでも広がっていています。日本の方も、時々利用してくれます。

部屋は至ってシンプル。ベッドと机と椅子。それだけです。長期滞在の人には、キッチン付きの部屋もあります。灯油を使ったコンロは、料理を作るには時間がかかるものの、みなさん、なかなか工夫して料理をしています。

それからキャンプサイト。お金を節約したい人、バイクで旅をしている人などは、このキャンプサイトを利用してくれます（但しテントは持参）。アフリカ中をキャンピングカーで旅しているというご夫婦も来てくれました。ルワンダではテントを張れるところがありません（どこでもテントを張って良いというわけではありません）、最近たくさんの方が来てくれるようになりました。芝生はきちんと手入れされており、そこに椅子を持ってきて本を読んでいる旅行者を見ると、何だかこっちまでホッとします。そういう空間が作れてよかったなぁと実感するひと時です。

1997年にワンラブ・ランドを手に入れた時、そのあまりの広さに尻込みをしてしまった私。レンガを焼き、建物を建て、そこに一本一本苗木を植えて、未来を見つめていたのはガテラでした。頼りなかった苗木は、大地にしっかり根を下ろし、今では森のようになっています。町から戻る道で一休みしてワンラブ・ランドを見ると、そこだけ緑が広がっています。Googleで見ても、はっきりわかります。私たちの一番の誇りは、この緑です。あの時苗木を買ってきたガテラに、今やっと感謝できる私です。

お客さんの中には、何度もここを利用してくれる人たちも出てきました。ありがたいことです。そして国に戻り、宣伝してくれる人たち。ワンラブの家族が増えていっている気がします。



＜ワンラブゲストハウスの一室。お待ちしております。＞

レストランでは鶏や魚の丸焼き、それからルワンダの人たちが大好きな串焼きのお肉がメイン料理。注文をしてから出来上がるまで、ちょっと時間がかかるのが玉にきずなので（1時間くらいかかってしまう…）、おなかを空かせ過ぎていると辛い思いをします。ご注意ください。

これらゲストハウスやレストランで得た収益は、障害者支援の活動に還元されます。義足の材料を買ったり、ガソリン代になったり、スタッフの給料になったり。

ワンラブでは、その活動資金の大部分を寄付や助成金に頼っています。でも少しでも自分たちで収入を作りたいと思い、これらの運営をしています。その収益だけでは、活動を進めいくことはできないけれど、少しずつ泊ってくれる旅行者の数も増えてきて、嬉しい限りです。

ルワンダにいらっしゃる皆さま、ぜひワンラブ・ゲストハウスを利用してくださいね。泊ってくれることによって、あなたはもうワンラブのサポーター。首をなが〜くして、お待ちしております。

ルワンダ事務所代表ガテラより

【雨の降るある日】

土砂降りの雨の音を聞くと思い出す。あれはいくつの時だったっけ？子供の頃、大雨が降ると、私はよく一人で近くの大岩に行った。雨をさえぎるものは何もない。私に話しかけてくる友だちもいない。

ここは一人で考え事をするにはもってこいの場所だった。大岩の上に座り、びしょ濡れになることも気にならなかった。むしろ雨に打たれることが心地よかった。

そこで私はいつも神様にいくつかの願いをした。誰かに殺されて死ぬことのないように（私が生まれて数年後にルワンダの虐殺は始まった）。蛇にかまれて死なないように。そして、若い時はどんな苦勞も受け入れます。でも年をとってから飢えに苦しむことのないように。

神様は少なくとも今の時点では、私の願いを聞いてくれている。虐殺の時代も生き延びることができた。ワンラブ・ランドの中には蛇もいるけれど、たくさんいる猫たちがそれを退治してくれている。そして今、飢えることもなく、仕事を続けている。

つぎはぎだらけの服を着て、雨に打たれていたその時間は、誰にも邪魔されない大切なひと時だった。そんな自分のことを、家族は訝しがっていたっけ。

それから少し年月が経ち、ある日、私の指から流れる血を使って、それらの願いを紙に書いた。何故そうしたのかはわからない。とにかく自分の思いを書き記しておきたかった。そしてその紙を瓶に詰めて、近くの川に流した。

あれから何十年も経ち、その瓶は一体どうなったのだろうか。どこかにたどり着き、誰かに読まれたのだろうか。もしかしたらそれはナイルをたどり、大海にたどり着き、あるいは日本まで流れていったのかもしれない。世界はつながっている。きっとどこかで誰かが、私の願いを読んでくれていて、私のために祈ってくれているに違いない。

ルワンダの雨期。そんなことを考えながら、私の願いを聞いてくれている神に感謝する日々である。そしてこれからも聞いてくれると信じながら、今日も雨に打たれて仕事を続けている私です。

【2011年アビリンピックに向けて】

2007年に静岡で、障害者の職業技能を競い合うアビリンピック大会に参加したことは、先の通信でもその様子をお伝えしました。そして今！2011年、韓国で行われるアビリンピック大会に向けて動き始めました。

アビリンピック委員会では、現在種目を調整中。どんな競技に参加したいかアンケートが送られてきました。早速ラジオを使って障害者にアナウンス。自分の技術を申告するために集まってもらいました。

みなさん、さまざまな技術を持っているようです。中でも多かったのは、洋裁や民芸品を作れるという障害者たち。中にはネールアートと言う女性もいました。それから実際に自分が作ったものを持ってくる人たち。ただ正直に言えば、まだその技術は中途半端で、雑なものも多かった！

ルワンダで仕事をするようになって感じたことは、自分を売り込むために大口をたたく人も多いということ。「自分は〇〇ができる！」と言い張った割には、実際動いてもらうとほとんどハタフリだったとか…。だから彼らの言うことを鵜呑みにしてしまうと、後でがっかりすることもある。

今回は参加のための費用の一部をアビリンピックが支援してくれ、後はそれに向けて集めた寄付をプラスして参加することができました。でも今回は、彼らにも参加するための費用を負担してもらい、より真剣に考えることのできる人を送ろうと思っています。そのことを伝えると、みんな一瞬表情が曇る。きっとみんなタダで参加できると思っていたのでしょう。参加するだけではなく、自分も参加するための資金集めをすること。これが条件です。一人で費用を集める必要はない。家族やまわりの人たちに協力し一肌脱いだという気持ちを持ってもらいたいのです。

今回も恐らく義足製作の種目があるでしょう。使っている材料の違いから、今回は参加することを避けてしまったけれど、2011年にはその種目でも、ぜひ参加したい。だってそれが私たちの本業だから。

アビリンピック委員会から、例として挙げられた種目にはなかったものの、ルワンダの女性がしばしば収入を得るためにやっている仕事は、編み機を使ったニット編み。今回集まった障害者の中にも、かなりの数がいきました。日本でも一昔前（私の母の時代）には、ニット編みをする人が多かったと思います。実際家の押し入れの奥から、それが出てきました。ルワンダでは、寒い時、学校の制服の上にセーターを着ます。それらを編んでいる女性たち。アンケートの中にはなかったけれど、ニット編みの種目を増やせないかと言う一文を書き記しておきました。

ルワンダは虐殺後、確実に発展の道を進んでいます。少々雑でも商品として受け入れられていたものが、これからは質が追求される時代です。まだまだ気がつかない技術を持っている障害者たちがいるはず。がんばるぞ～！エイエイ、オー！

アビリンピックは2年後。一人でも多くのルワンダの障害者が、自分の技術を世界に知らせるために参加できるように、今から少しずつ準備を進めていきます。今、アビリンピック参加のための選手権を開こうと計画を立てています。果たしてどうなる事やら。乞う、ご期待！

【2月頃、日本に帰国します。】

ルワンダ・ブルンジを行ったり来たり、なかなか日本に帰国する事が出来なかった私たち。予定を調整して、2010年2月頃、日本に帰国し報告会などを行いたいと考えています。またそれに合わせて、私たちの活動に関するお話をさせて頂く場所を探しています。

一昨年・去年とプライベートなこともあり、日本には滞在していたものの、活動の状況を伝えたり、支援して下さっている人たちに会ってお話しをする機会を作ることができませんでした。こんなことでは忘れられてしまう！支援してもらっているのに、こんなことではいけない！と反省。2月から数カ月ほど、日本に戻り、その機会を作ろうと思っています。

自分たちで報告会を開いたり、学校・大学・NGOの集まりなどで、ルワンダ・ブルンジの波乱万丈の活動を、本音で話せる機会を探しています。裏話もいっぱいある本音トーク。

どうぞ、ワンラブ通信を読んでも下さっている皆さま、そんなチャンスを私たちに下さい。特にガテラは学校で話をするのが大好き。少々遠くても、出来る限り足を運びたいと思います。

ワンラブの事、ルワンダ・ブルンジの事など、聞いてみたい！と言う皆さま、ご連絡ください。お待ちしております。

連絡先：

onelove@rwanda1.com

info@onelove-project.info

※通信事情の関係で、お返事まで時間がかかる場合がありますが、ご了承ください。

【書き損じはがきの季節です！】

12月に入りました。皆さん年越し、お正月を迎える準備で大忙しでしょうか？そんな忙しさの中、心の片隅に置いておいて頂きたいのが、書き損じはがきの事！！

2年前より、本格的に皆さんに呼びかけを開始させていただきましたが、これには本当に助けられています。今回の通信も、購入した切手は一切なし！！すべて、みなさんから寄せられた切手と、書き損じはがきを、切手に交換したもので、発送できました。本当にありがとうございます。

2009年5月1日～10月31日まで

みなさまから頂いた、書き損じはがき・切手・
テレホンカードの合計金額

約 185,856 円

1枚を大切に送って下さった方、過去に収集していた切手を送って下さったから、みなさんに呼びかけて集めて下さった方、みなさん本当にありがとうございました。

書き損じはがき・切手・未使用テレホンカードの
送り先

253-0052

茅ヶ崎市若松町 12-8 コーポ原 202

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト まで



今号の患者さん

ブルンジの患者さんのお話し。

その男性はまだ30代前半。町で物乞いをしていた人です。ブルンジでこれから仕事を始めようとしている時、障害者たちにインタビューをしていました。その彼は、どこで手に入れたのか、赤・緑・黄色のラスタカラーに塗られた車いすに乗ってやってきました。その日はたくさんの障害者が集まりました。多くの人は、義足がその場でもらえる、あるいはお金をもらえると聞いて集まってきました。でもインタビューだけ。彼らがどんな支援を必要としているか調査するだけでした。何ももらえないとわかった彼らは、段々と興奮してきて、口々に文句を言います。中にはお酒やガンジャ（いわゆるマリファナ）で酔っている人たちもいます。車いすに乗ってやってきた彼も、酔っ払い大声をあげている一人です。とにかくそんな彼らをなだめ、その日のインタビューは終わりました。

そしてある日。義肢製作所に義足を作ってもらいたいと彼が再び戻ってきました。あの時とは違って、真剣な顔をしています。紛争の被害を受け、両足を失ったそうです。自分は町で物乞いをしている。でも本当はそんなことしたくない。みんなと同じように、自分の足で立ち上がり、仕事を見つけて、自分の人生を作っていきたい。そう語りました。



紹介します！ワンラブのスタッフ

8月に5人目の義肢製作の研修員が日本へ向かいました。ガテテと言う名前の、38歳の男性です。彼がワンラブに入ってもうずいぶん時間が経ったような気がするけれど…。あっ、大変！研修員として受け入れられるのは40歳まで。今日本に行かないと、もう次のチャンスはありません！

94年の虐殺の時、彼は反政府軍として前線で戦っていました。なんとなくなよっとしている姿からは、想像しづらいです。フタレという町に行く途中に、彼が戦っていた場所があり、そこを通るたびにその時の話をしてくれます。足に砲撃を受け、その様子を見た兵士たちが「もう、このままここに置いていくしかないだろう…」と言う話を自分の耳で聞いたガテテ。生と死の間をさまよったすさまじい体験。そのため足には脚長差があり、普段は杖を使って歩いているけれど、疲れると杖の握る部分に短い方の足をちょこんと乗せて立っている姿がトレードマーク。

仕事の時は、ほとんど目立ちません。おしゃべりもあまりせず、マイペース。存在感が少なかったのが、どの位仕事ができるようになったかあまりわからず、いつの間にか年月が経っていました。ハッと気がつくと、結構いろいろな仕事を自分でこなすようになっていてびっくり。彼の希望を少しでもかなえるために、両足の義足を作りました。早速装着。手すりを使いながら、歩いています。彼の希望を少しでもかなえるために、両足の義足を作りました。早速装着。手すりを使いながら、歩いています。歩けることが余程うれしかったのか、一生懸命歩行練習です。

そのうち手すりを使わずに、杖で歩けるように。そしてがんばって杖なしでも歩いて見せます。心配して見守っていたワンラブのスタッフも、段々と上達していく彼の姿を見てうれしそう。その彼は、今毎日義肢製作所にやってきては、みんなの仕事風景を眺めています。自分に何ができるか必死に探しています。

インタビューをしていた時の彼とは大きな違いです。あの時は、単純に何かをもらうためにやってきた。でも今は自分の人生を前向きに生きようと、何かを探しています。

義足を手に入れて、その反応は人、さまざまです。当たり前のように受け取る人。そして彼のように、更なる可能性を求める人。

これから彼がどんな人生を歩むのか。少しでも義足が役に立ってくれば、作った甲斐があったというもの。ワンラブのスタッフと一緒に、彼の今後を見守っていきたいです。



仕事が終わって、みんなで酒屋に行くと、彼のユーモアがわかってきます。彼自身お酒は飲めないけれど、ちょっとはにかみながら、戦っていた時の事を面白おかしく話したり、他のスタッフをからかったり。しかし、その反面彼も全くよくみんなから、からかわれます。それは何故か？

とても奥手で、女性が近寄るとビビってしまうから。普通に女性と話している分にはぜんぜん問題ないけれど、ちょっと色目を使って女性が近寄ってくると、息も絶え絶え…。その姿を見たいがために、他のスタッフはわざときれいな女性に話しかけさせたりしています。ルワンダではなかなか珍しいタイプの男性です。ユーモアはたっぷりあるけれど、奥手であるが故、未だ一人身です。本人は結婚する気があるのだろうか？

日本へ一人で行くことがとても心配だったのか、何かにつけてノウハウを聞いてきた彼。出発の時の荷物を見せてもらおうと、半分以上が、先の研修員が日本の知り合いに渡そうと託したお土産。それを断らない人の善すぎるガテテ。

ガテテより後に入った人が、先に日本に研修に行ってしまった時は、きっと悔しかったんだろうな。その悔しい気持ちをもち続けて、日本でも勉強に励んでくれればうれしいな。がんばれ、ガテテ！

<ガテテ・ディアネ・真美>





日本事務所より

【今月の患者さん、追記】

「今月の患者さん」のコラムで、患者さんの紹介をする時「紛争の被害を受けて」と書きました。でも実はそうでなかったという事実が発覚。本当はこうでした。

物乞いの人生を送る前、彼はどこにでもいるような、すかした青年でした。すかし過ぎて、人生を間違い、人のものを盗る、つまり泥棒を生業にしていました。

ある日、盗みを働いている時に、警察につかまり逮捕。警察は殴る蹴るの暴行を働き、その結果両足がめちゃくちゃにされ、切断を余儀なくされてしまったそうです。

立ち上がれなくなった彼が選んだ生きる手段は「物乞い」。そんな彼を見かけた一人の外国人が、義足を作るようワンラブに連れてきました。

ワンラブで義足を作ること、そしてその後自立できるように、サポートをすることを約束すると、その外国人は安心して、自分の国に帰って行ったということです。

そして今、その患者さんはワンラブで義足を作る仕事の見習いをしています。

彼も生活していかななくてははいけない。だから少し生活費として給料を渡しています。この間、初めての給料を受け取りました。

先日、スタッフと一杯やっている時、彼が言いました。「初めての給料は全部、お母さんに持って行った。とても喜んでくれた。次は素敵なお嫁さんを見つけて、人生と一緒に歩んでいきたい」

ああ、そんな一言が嬉しくて、もっと彼を応援したくなった私たちです。がんばれっ！

【日本事務所を手伝ってくれる方、探しています】

日本事務所では、下記の事を手伝ってくれる方を募集しています。それぞれ、できる時間にできる事をお願いしたいと思っています。ご興味持たれた方、下記までご連絡ください。よろしくお願いします。

- 会計事務・名簿管理
- 日本とルワンダ・ブルンジ事務所との連絡
- ワンラブ通信発送作業
- イベントのお手伝い
- 郵便物のチェック

【ガテテ in JAPAN】

ガテテの日本での様子をお伝えします。ガテテは5人目の研修員になり、38歳と今までの研修員の中では、一番年長です。そこで問題になったのが、「日本語」。本格的な技術研修になる前に、1ヶ月間の日本語の研修を受けるのですが…。うーん。苦戦している様子です。今から振り返ると、当時20代前半だった、パトリックやディアネの吸収力はすごい物がありました。ガテテはガテテなりのスピードで、進んで行って欲しいものです。

また、日本での生活はガテテにとって初めてだらけ。ルワンダでは、お手伝いさんの様な、身の回りの事をしてくれる人を雇うのが一般的。どこの家庭にも、だいたいいます。そのため、料理や洗濯、掃除など今まで一度もした事がない、という人もいます。そう。ガテテはまさにそのタイプ。手つきは怪しいものの、今では料理の腕は上達して、今ではお友達やガテテをサポートしてくれる人に、振る舞う事も！すごい！ガテテ！

ガテテがお世話になっている神奈川県国際研修センターのお祭りでは、民族衣装を着て登場。過去に来た4人から色々と聞いてきたのか、頭につける飾りまで持参です。それがガテテに、とっても似合っている！来場したお客さんから、「かっこいい」「一緒に写真に写ってください」など声をかけて頂き、笑顔で応じるその姿。さらに、歌の発表では、ステージに上がり、ルワンダ語の歌を堂々と歌い上げました。ルワンダでは、シャイなイメージが強いガテテですが、日本に来て、なんだか少し、たくましくなった気がします。3月まで研修は続きます。慣れない事も沢山あると思いますが、いろんな経験をして、ルワンダに帰ってほしいと願っています。

【感想お待ちしております。】

ワンラブ通信の感想・要望・ルワンダ・ブルンジのこんな事が知りたい！などありましたら、メール・お手紙・振込の際の用紙の通信欄等をなどで教えてください。今後の参考にさせていただきます。よろしくお願いします！

【おことわり】

- * 発送作業の都合上、振込用紙を必ず同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。
- * 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-8 コーポ原202 Tel:080-6564-4448 FAX:0467-86-2072

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 41号 2009年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info>

